

# なぜ西側は、ロシアを打ち負かすことも“許す”こともでき ないのか

【訳者注】ヴルチェクを書くものは、常に、その真実と真率によって人を感動させ、読者のコメントにそれが現れている。しかし中には「この男、正気か？」というのも、「スターリンを忘れたか？」というのものもある。おそらく日本人にもそういう反応が多いだろう。これは、我々の知っているロシアが、アメリカ（西側）の目を通じて見たロシアでしかないからだと思われる。ナチス・ドイツを敗退させたのは、実は、ロシアの大犠牲を伴う奮戦だったが、我々はそう教えられていない。またソ連の共産主義は、イルミナティに由来し、イルミナティに利用されたものであって、ロシア人の考えたものではない。一つの世界政府、私有財産の廃止、愛国主義、家庭、宗教の廃止等はすべて、**New World Order** の目標である。

「ロシアは反応せざるを得なかった。なぜなら、ロシア以外の誰が反応する？」という一文 (p.3) は肺腑をえぐる。なぜならロシアは、西側に共闘を呼び掛けても、彼らは応じず、そこでやむをえずロシアが単独行動をとると、西側はこれを咎め、ロシアの野心だと言った。ここに、この論文の歴史的テーマ——理不尽に対するロシア人の偉大な忍耐と自己犠牲——が集約されている。

By Andre Vltchek

December 18, 2015

歴史的にも、直観的にも、ロシアは人類の生き残りのために戦ってきた。もちろん物事は、必ずしも、そんな言い方で明言することも断言することもできない。しかし、すでに数回にわたって、この広大な国家は、この惑星の生き残りそのものを脅かしてきた、最も強力な悪の勢力に立ち向かってきた。

第二次大戦の間に、ソビエトの人民——主にロシア人——は少なくとも 2,500 万の男女や子供を犠牲にし、最後にはナチズムを敗退させた。現代史の他のどんな国家も、これほどの経験はしていない。

勝利のすぐ後で、ロシアは、中国、そして後にはキューバとともに、歴史上、最も恐ろしく崇高な計画に乗り出した。すなわち西側の植民地主義の組織的な撃滅計画である。世界の至るところで、抑圧された大衆が、ヨーロッパと北米の帝国主義的野蛮行為に対して立ち上が

った。そして彼らに希望の灯りと、実質的な財政的・イデオロギー的・軍事的援助を与えようとしたのは、ソビエト連邦だった。

抑圧され、破滅させられた国家が、次から次へと独立を勝ち取っていくにつれて、ソ連邦とロシア人民に対する憎しみは、ほとんどすべての西側世界の首都で、いや増していった。結局のところ、非白人地帯の略奪は、“文明世界”の自然権と考えられたのである。

アメリカとヨーロッパでは、植民地主義とか帝国主義といった言葉は、急速に、極端にネガティブな意味合いを帯びるようになった——少なくとも表面上は。ロシアを攻撃し、悪魔化することは非生産的なことだった。そこで「悪の帝国」という念の入った理論が作られた。

ロシアは常に“邪魔者”だった——ワシントンやベルリン、ロンドン、パリの残忍な計画、惑星全体を支配し略奪しようとする計画を、壊しにかかる巨大な国だった。

しかし、その行為が崇高であればあるほど、それへの攻撃はますます侮辱的になっていった。

ロシアは常に、一致協力して、ただ一つの人道的で、深く道徳的な目標を達成するために、すべての力を投入する恐るべき能力をもっている。その苦闘には、何か神聖なもの、“より高い”もの、全面的に本質的なものがずっとあった。

「立ち上がれ、巨大な国家よ、必死の戦闘に立ち上がれ！」——これは第二次大戦のときの最も偉大な愛国歌の一つの出だしである。ロシアが戦うとき、勝利以外は眼中にない。いかなる代価も高すぎない。

<https://www.youtube.com/watch?v=9PtawlOV8hw&list=RD9PtawlOV8hw&spfreload=10>

運命がロシアを選んで、全世界のために戦わせた。あなたが“運命”を信じていなければ、“ロシアの魂”を理解することはできない。それは宗教ではない——ロシアは大きく言って無政府的で“無神論的”である。しかし彼らは運命を信じ、受け入れる。

のみならず、ほとんどの場合、ロシアには現実に選択肢がない。それは常に、勝利か、さもなくば人類の終わりか、という状況に直面してきた。そして世界とその生き残りが脅かされたとき、ロシアが常に立ち上がった——憤怒に満ち、しかしその怒りと決意はきわめて美しかった。それは全身全霊による戦い、国土のすべてをかけ、すべての人民による戦いだった。それはほとんど常に勝利した——しかし恐るべき代価において、何百万の息子や娘を埋葬しながら、言葉に尽くせない悲しみと苦痛を伴うものだった。

そして誰一人それを支持する者も、慰める者もいなかった。戦火がまだ荒れ狂い、涙が、愛する者を失った母や妻の顔を流れる間も、この国は唾をかけられ、西洋のマキアベリ体制と彼らのプロパガンダによって、嘲笑され、辱められた。

その英雄主義は軽視され、その犠牲はあざけられた。人類のために死んだ、その何百万もの人民は、実は無駄死にだったと繰り返された。

その英雄的な苦闘の見返りとして、ロシアはただ2つ——認めてもらうことと、敬意を払われること——を除いて、何ひとつ要求しなかった。ロシアは、そのどちらも与えられなかった！

\*

今、再びロシアは立ち上がって、ISIS に対して英雄的な戦いを始めている——すなわち、あのムスリム宗教の身の毛もよだつパロディ、西側とそのタチの悪い従僕によって創られ、武装された者たちに対して。

ロシアは反応せざるを得なかった。なぜなら、ロシア以外に誰が反応する？ 何世紀もの西側の十字軍行動と、ぞっとするような植民地主義の実践の後で、我々の文明の揺籃の一つとしか言えない、この素晴らしい中東に、残されたものはほとんどなくなった。中東は略奪され辱められて、西洋に仕える、哀れな従僕国のモザイクに堕ちてしまった。何千万の人々がこれまでに殺された。あらゆる物が略奪された。社会主義的な世俗的政権が追い詰められ、転覆された。

私はこれまで、世界のこの部分で集中的に仕事をしたが、確実に証言できることは、アフリカを除いて、世界のこの地域ほど、西洋の貪欲と野蛮行為によって傷つけられ、痛めつけられた領域は、他にないということだ。

希望を失い、致命的に傷つけられ、自暴自棄になり、最近もっとも苦しんでいる、二つの古代からの国家——シリアとイラク——が、助けを求めてロシアに接近した。

そして、ロシアは援助の約束をした。

もちろん、常に私に聞こえてくるのは、「ロシアの利害」「ロシアの勢力圏」を論ずる、欧米からの雑音交響曲である。なぜかと言えば、西洋には、何も神聖なものがなく、またあり得ないからである。あらゆるものが必然的に、暗い冷笑と、ニヒリズムに染まっている。西洋

が殺し屋のように振舞えば、そのとき残りの世界も、同じ色と影に描かれねばならない。結局、西洋に同盟国はない。それは感情を持たない。あるのは利害だけである。私はこれを作っているのではない。これは私が、アフリカの破壊された地域で生活し、仕事をしてきた時に、何度も何度も聞かされたことである。

私はパリやワシントンで言われていることには全く関心がない。重要なのは、イラクやシリアやレバノンで言われていることである。そこではどんな事情なのか教えてあげよう——もしあなたが、そういう国の理髪店へ入り、自分はロシア人だと言うと、人々は立ち上がり、あなたを抱擁し、泣く人もいるのだ！

ロシアは決して他国を攻撃しない。しかし攻撃されれば、その怒りは震え上がるほどだ——特に戦っている最中であれば。「剣をもって我々に近づく者は、誰であれ剣をもって滅びる」と、13世紀のノヴゴロドの領主アレクサンデル・ネフスキーは言った。

最近のトルコ空軍による、ロシア爆撃機のシリア上空での撃墜は、更に広がる地域戦争の危険を増した。

NATO の一員であるトルコは、この地域全体にテロを拡散している——リビアやソマリアから、イラク、シリア、そして自国のクルド人地区まで。彼らは人々を拷問し、ジャーナリストを含めて多くの人を殺し、何百万人もの人々から自然資源を奪い、最も過激な、主としてカタールの援助するジハードの教えを広めている。

私は何年も前、1990年代初期に、イスタンブールで **Recep Tayyip Erdogan** (エルドアン) に会ったが、そのとき彼はそこの市長で、私は、西側がいかにかユーゴスラビアを組織的に破壊しているかについて書きながら、“自分の傷を舐めて” いた。

「あなたはトルコ語を話しますか？」と彼は、ある会合のとき私に聞いた。

「よく話せませんが、少しなら」と私は答えた。

「しかし、あなたは我々の党の名前を完全に発音できる！ それは我々がいかにか重要な存在を示している。」

最初に会ったときから、私は彼がいかにか誇大妄想癖の、劣等感でいっぱい、攻撃的人物かがわかった。私は彼が“そこまでやる”とは考えなかったが、それをやった。

彼のおかげで、その地域全体の何百万の人々が苦しんでいる。

そして今度、彼はロシア爆撃機を撃ち落とし、イラクを侵略した。

トルコは数回にわたってロシアと戦っている。そしてほとんどいつも負けている。実は2つの大戦の間に、彼らが何とか生き残ったのは、ソ連が与えた援助のおかげであった。トルコは次の行動にもっと慎重でなければならない。

ロシアはただ“戦争を戦う”だけではない。人類の生き残りのためのその戦争は、巨大な芸術作品、詩や交響曲といってよいものである。それを説明するのは難しいが、確かにそうだ。すべてが互いに絡み合っている。

ロシアの SU-24 機を背後から撃ち落とすことは、第二次大戦で死んだ 2,500 万の人々を揺り起こすようなものだ。それは恐ろしいと同時に、愚かな行動である。ロシアでは、こういう行動は取らない。戦いたいというなら、前へ出て正面から戦うがよい。

しかし、もしあなたが卑怯者のように殺すなら、そして近隣や、すでに荒廃した国を侵略するなら、あなたはいつか、ただの SU-24 でなく、大量の戦略爆撃機を迎えることになる。

\*

ロシアを打ち負かすことはできない。それには多くの理由がある。一つは現実的なもので、この国は核超大国である。もう一つは、それが通常は正しい理由によって戦うからである。そしてそれは全力を捧げて、全人民が戦うからである。

もしロシアが存在しなかったら、この地球惑星は、少なくともこのような姿では存在していないだろう。西側とそのファシスト・キリスト教国家が、世界を完全支配しているだろう。“非人民”と“非白人”は、動物のように扱われるだろう（現在よりもっとひどいやり方で）。支配の及ばない所はなく、盗みと破壊には限度がなくなるだろう。

いわゆる“文明世界”（劇場や学校を、血の川と他者の死体から築く文明）が、遮るものなく、地球の絶対支配へ向かって、大手を振って行進しているだろう。

幸いなことに、ロシアが存在している。そしてそれは打ち負かすことができない。そして今後もできないだろう。しかし同時にそれは、西側によって決して許されないだろう——地上の悲惨な者たちの側に立つという罪とがによって。